

# 学部生による中学校国語科「書くこと」の学習支援の試み

— 生徒の意見文にコメントを添える演習を通して —

山口 政之

An Attempt by Undergraduate Students to Support the Learning of “Writing”  
in the Japanese Language Course at Junior High Schools

— Through Exercises to Add Comments to Students’ Opinion —

YAMAGUCHI Masayuki

## 要約

中学2年生が国語科「書くこと」の学習として書いた意見文に対して、教育学部生がコメントを添えるという学習支援を試みた。まず、1, 2年基礎ゼミ生が中学生の意見文を読んで1次コメントを書いた。次に1次コメントの内容に対して4年専門ゼミ生が個別に批評した。そして、専門ゼミ生は自分達の批評内容を集約する形で意見文に対するコメントの書き方について基礎ゼミ生全員に提言を行った。最後に、専門ゼミ生による提言と個別に伝えられた批評を受けて基礎ゼミ生は自分の書いた1次コメントを最終コメントとして書き直した。基礎ゼミ生はコメントの二度作文に取り組むことで、コメントとして伝えるべき内容と表現について吟味することができた。また、専門ゼミ生は意見文に関する学習指導要領の指導事項を系統的に理解し、生徒の意見文と基礎ゼミ生のコメント内容を分析して、望ましい評語とは何かを具体的に考えることができた。

キーワード：意見文、評語、コメント、二度作文

## 1. 意見文に対するコメントとは

### (1) 国語科教育における評語

教員が教科を問わず児童生徒の作品評価で評語を書くことを「赤ペン<sup>1)</sup>を入れる」や単に「赤ペン」、「朱書き」などと呼ぶことがある。国語科の書くことの学習においては、昭和期に生活作文の指導が盛んに行われており、児童生徒が書き上げた作品に対して教師が最終評価をする指導がこの期の典型であった<sup>2)</sup>。

こうした教室の実情から市毛勝雄(1988)は昭和期までの作文指導における評語を「作文の終末

評価としての一行批評」と総括し、今後の評語の在り方として「いったん書いた作文に対する批評の言葉、評語を手がかりにもう一度だけ書き直してみる」こと、すなわち「評語を活用する作文指導の方法」を「二度作文」と称して提案した。

その後、平成期になり義務教育において生活科や総合的な学習の時間が創設され、国語科の書くことの学習においても調べたことをまとめる文章や意見文など、論理的な文章を書かせようとする機運が高まってきた。また、文部科学省から形成的評価による授業改善が求められるようになり、書くことの学習においても学習過程での評価が行

われるようになってきた。

こうした背景を受けて牧戸章（2003）は、評価の対象を結果としての作品だけでなく、書くことの学習全体の過程に目を向ける必要性を指摘し、対話活動を取り入れる学習を提案した。この牧戸（2003）のいう「対話活動」とは、市毛（1988）のいう「二度作文」の具体的な提案と見做すことができる。

## （2）意見文に対する評語

市毛（1988）や牧戸（2003）の考えを意見文に敷衍するならば、自分の意見をつくる過程とは、他者の意見や調べたデータなどをどのように自分の問題意識の上に構築しているかを明確にすることであり、意見文の骨格となる構成を評価してから記述に移るという学習展開になるだろう。

授業者が学習者の一次原稿を読み、その構成と内容の両面を評価して完成原稿の作成に役立てる指導をするには、個別に評語を書いて伝えることになる。昭和期には模範となる意見文の一部をOHPで投影し、表現内容を吟味していく一斉指導があった<sup>3)</sup>。しかし、一斉指導では本当に支援を必要としている学習者には助けにならないことに気付いた教師はこの方法をとらない。手間はかかるが、やはり個別指導の方が効果的である。

愛知県西加茂郡三好町立天王小学校（1986）に収められている「しっかりした考えのある文章を書こう」という節には第5学年の意見文指導が報告されており、その中で報告者は次のようにいう。

しっかりした考えのある作文を書かせるためには、教師が、その作文にとって大切なことは何かをおさえた上での助言を取材や構想の段階に与えることが大切である。

これは市毛のいう「二度作文」の重要性を授業者としての実感を込めて述べているものである。授業者であれば個別に評語を書くことはそれほど難しいことではない。そもそも評語を書くこと自体が専門職としての仕事である。教職に就いていない学部生は評語が書ける立場ではないと言えないこともない。学習支援として学部生が書けるの

は「評語」ではなく、広い意味での「コメント」である。

## （3）コメントに求めたい専門性

学部生が教育ボランティアなどに参加すると、学級担任から児童生徒の作品にコメント<sup>4)</sup>を書くことを求められることがある。また、教育実習中、実習生が授業をした際には、学習ノートや学習プリントに記述された内容を授業後に評価することが求められる。この場合、実習生が学習ノートや学習プリントに一言コメントを書くことがある。

しかし、「コメントを書く」と言っても、学習上の位置づけや文種、目的などが異なれば、コメントに求められる内容が異なってくる。例えば、国語科「書くこと」の学習の場合、授業者が作品にコメントを書く機会は荒く言って2つある。

1つは完成した作品に対して行う場合である。児童生徒が書き上げた生活作文や日記であれば、学部生は概ね内容に共感するようなコメントを書けばよい。この場合コメントを書く側には作品に対する学習評価が念頭にあるものの、それをそのまま児童生徒に伝えるようなことはあまりしない。基本的には学習への取り組みや内容を認めるコメントを書くことになる。

もう1つは市毛（1988）や天王小学校（1986）が述べたように、推敲段階の作品に対して行うものである。この場合のコメントには「改善への助言」が求められる。どこをどうすればよくなるのかを端的に指摘することが求められる。しかし、それは学部生にとって容易なことではない。特に対象が形式を気にせず自由に書くタイプの文種ではなく、意見文や小論文のように形式を意識して書くタイプの文種であれば、形式に関する専門的な知識に基づいたコメントが必要になってくる。

後者、つまり「二度作文」の場合、学部生は何を拠り所としてコメントを書けばよいのだろうか。教師が児童生徒の書いた意見文に評語を書くのであれば、単元の評価規準に則って評語を書く。その評価規準は学習指導要領の指導事項をもとに作成されているので、指導事項に関する知識こそが教師の持つ専門性であり、学部生が学ぶべき内容である。

そこで、小学校学習指導要領と中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領の国語を読み、意見文の指導に関わる内容として「情報の整理」では引用・出典を、書くことにおける「考えの形成」では理由・根拠・引用を中心に学びのつながりを確認したい。

まず、学習指導要領における小学校国語、中学校国語、高校国語の内容〔知識及び技能〕のうち「(2) 情報の扱い方に関する事項」の系統を概観する(以下、筆者がキーワードと考える語をゴシックに改めて引用した)。

【小学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・第3学年及び第4学年

イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、**引用の仕方**や**出典の示し方**、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。

【中学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・第1学年

イ 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、**引用の仕方**や**出典の示し方**について理解を深め、それらを使うこと。

【高等学校学習指導要領(平成30年告示)・国語】

・現代の国語

オ **引用の仕方**や**出典の示し方**、それらの必要性について理解を深め使うこと。

このように「引用の仕方や出典の示し方」という文言は、小学校、中学校、高等学校の全てに明記されている。現行の学習指導要領では「引用の仕方や出典の示し方」を繰り返して徹底的に指導することを求めているのである。

次に、書くことの領域を見てみる。

【小学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・第5学年及び第6学年

エ **引用**したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。

【中学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・第3学年

ウ 表現の仕方を考えたり資料を適切に**引用**したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。

意見文の中に根拠となる資料やデータを引用して自分の考えを構成していくことを国語科でしっかり指導することが求められている。

さらに「言語活動例」を見てみる。

【小学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・C読むこと：第3学年及び第4学年

ア 記録や報告などの文章を読み、文章の一部を**引用**して、分かったことや考えたことを説明したり、意見を述べたりする活動。

【中学校学習指導要領(平成29年告示)・国語】

・C読むこと：第2学年

イ 詩歌や小説などを読み、**引用**して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

【高等学校学習指導要領(平成30年告示)・国語】

・現代の国語：書くこと

ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を**引用**しながら、自分の意見や考えを論述する活動。

どの校種でも引用を踏まえて論考させていくことが求められているので、引用に関しては学部生のコメントの中で確実に取り上げていく必要があるだろう。

(4) コメントを評価するような演習

こうして小中高12年間の学びで得た知識が、大学入学後はアカデミックスキルとして活用される。例えば、初年次教育用の教科書として出版されている井下(2017)には、「レポートの書き方の基本を学ぶ」という章の中で、次のように説明している。

レポートの書き方の重要なルールは、自分の言葉と他者の言葉を明確に区別することです。……(中略)……きちんとした倫理観を持ち、正しく適切な引用を行いましょう。

この部分を読ませるだけでは教育にならないので、大学の授業では演習を通して身に付くようにする。具体的な言語活動を通してスキルを身に着けさせるという考え方は義務教育段階と同じである。

しかし、国語科では実作を伴う言語活動だけでなく、他者の作品を批評するという形で、スキルの使い方を確認することがある。ペアワークとして取り組む際は相互批正とも呼ばれる。その内容は批評といってもよい。「批評」という言語活動は中学校学習指導要領第3学年の「書くこと」の言語活動例の中で、

ア 関心のある事柄について批評するなど、自分の考えを書く活動。

として取り上げられている。批評をする際には自分なりの観点を定めてまとめた量の文章を記述することになるが、コメントの場合は目指す方向は批評と同じなのだが、端的な記述が求められる。それは「コメント」に関する辞書の説明に「他人の意見、論文や事件に対する補足的な評論や意見」（『精選版日本国語大辞典』）とあることから分かるように、「補足的」という控えめな立場が許容されている。

児童生徒の推敲段階の作品に対して学部生がコメントを書く場合、感想だけでは学習者は物足りないと感じるだろう。しかし、教員のような責任のある立場から批評をすることはできない。それでも教職を目指す学部生であれば、改善のヒントになるようなコメントが期待される。やはり表現は穏やかにしつつも学部生として学習者を納得させるようなコメントが書けるように指導していきたい。そのためには単に児童生徒の意見文に学部生がコメントを書くという演習ではなく、学部生の書いたコメントをさらに学部上級生が評価してコメントの内容を再考させるような演習を行いたい。

## 2. 実践の構想

### （1）期待される意見文の指導

平成29年告示の小学校学習指導要領で「情報の扱い方に関する事項」が新設された。これに伴い

情報を扱いながら「考えの形成」を行う指導が強調された。これからは総合的な学習の時間で探究した内容を文章表現していく学習がますます盛んになることが期待される。

しかし、学部生の初等中等教育段階での書くことの学習の実態を調査した矢部（2022）はいう。

「行事作文」と「読書感想文」の指導が、現在の初等中等国語科教育の主流を占めている。

具体的には「行事作文」と「読書感想文」の指導が、小学校では合計91%、中学校では合計83%である。これは裏を返せば「行事作文」と「読書感想文」以外の、例えば意見文の指導が国語科ではそれほど行われていないことを示唆している。

また、総合的な学習の時間にレポートないし意見文を書かせる指導が活発になりつつある現状に鑑み、教職を目指す学部学には国語科の「考えの形成」に関する知識が校種を超えて系統的に理解される必要がある。

### （2）中大連携

今年度始めに筆者の知人の中学校国語教師から、「生徒の意見文を大学生に読んでもらい、コメントをいただけないか」という依頼があった。実践研究としてまとめるということではなく、日常の授業実践にちょっと協力できないかという依頼である<sup>5)</sup>。

担当している中学2年生が国語の授業でSDGsに関する意見文を書いたので、大学生のコメントを受けて意見文を新聞の投書として書き直させるという実践を構想しているとのことであった。中学生にとっては、大学の演習でSDGsを取り上げている敬愛大学教育学部の1,2年生が自分たちの意見文を読んでコメントをくれ、そのコメントを活かして意見文を新聞の投稿用書き直して実際に投稿するという学習になる。

小学校の教員を目指している学部生が中学生の意見文にコメントを書くというような演習にどのような意義があるのだろうか。おおむね次の3つが考えられる。



- a. 意見文という文種はどのようなものか、中学生の書いた作品を読んで具体的に知ることができる。
- b. コメントに何が求められるのかを考えることで、小学校および中学校学習指導要領国語科の内容に対する理解を深めることができる。
- c. 机上の演習ではなく、中学生から実際に依頼されてコメントを書くことで、演習の緊張感が高められる。

特に、b.については、中学校段階の学習内容を理解することで、その基礎となる小学校段階の学習内容を関連させてよりよく理解させることができるだろう。具体的に学習指導要領の書くことの領域における「構成の検討」の指導事項からキーワードに注目すると次の系統が指摘できる。

小学校中学年「段落相互の関係」  
小学校高学年「文章全体の構成や展開」  
中学第1学年「段落の役割」  
「文章の構成や展開」  
中学第2学年「段落相互の関係」  
「文章の構成や展開」  
中学第3学年「論理の展開」  
「文章の構成」

小学校で重点的に指導する「段落相互の関係」は、中学校で「論理の展開」の指導につながる。このことを学部生には理解させておきたい。つまり、中学生の意見文を読んでコメントを書く際には、「文章の構成」に着目すること。このことを演習の中で強く意識させたい。学部生にとっての「文章の構成」とは、「資料を適切に引用」(中学3年)するといったアカデミックスキルにも通じることである。

そこで中学生の学習と学部生の演習を関連付けて、学部生が一方的に学習支援をするのではなく、学部生も学べるような実践を行いたいと考えた。コメントを依頼した中学校教師の思いを察するに、学部生に求めるコメントとは内容への共感や表記上のミスだけではないだろう。中学生の学習内容を考慮して「構成」や「論拠」などについての指摘も期待していると思われる。生徒の作品

をよりよくするために再考を促すようなコメントが書けるように指導したい。

### (3) コメントの二度作文

市毛(1988)が提案した「二度作文」を学部生のコメント作業に取り入れ、コメントに求められる内容について吟味させようにした。まず、中学生の書いた意見文に1,2年基礎ゼミ(以下、「基礎ゼミ」と称する)生が1次コメントを書き、相互批正をして書きなおす。次に書き直した1次コメントを4年専門ゼミ(以下、「専門ゼミ」と称する)生が批評する。最後に専門ゼミ生の批評を受けて基礎ゼミ生はコメントの最終稿を書き上げる。このような演習を構想した。

#### ①基礎ゼミ内での異学年交流

2022年度の本学教育学部基礎ゼミでは1,2年生の異学年交流を行っている。前期の研究課題ではSDGsを取り上げ、各クラスで1グループ1年生4名と2年生4名ほどの異学年グループを3グループ編成し、自分達で設定した課題について探究していく演習を行った。この演習ではアカデミックスキルの観点から、自分達の研究のまとめをポスター発表する際には、正確な引用、出典の明記が必須であることを前年度も指導している。

今回は筆者が担当しているクラス独自の取り組みとして、中学生の意見文を読んでコメントを書く演習に取り組むことを説明し、個々の書いたコメントを異学年グループで読み合い、望ましいコメントの在り方を考えるという演習の目的を話した。

#### ②基礎ゼミと専門ゼミとの異学年ゼミ交流

今回、シラバスの記載内容とは別に基礎ゼミ生と専門ゼミ生の異学年ゼミ交流を構想した。両者の違いは基礎ゼミ生が初等国語科指導法を学んでいないのに対して、専門ゼミ生は初等国語科指導法を履修し終え、かつ、初等国語科指導法の専門ゼミに所属していることである。

専門ゼミ生は、学習指導要領の書くことの領域に示された指導事項の系統を踏まえて中学生の意見文を読み、丁寧な作品分析を踏まえて基礎ゼミ生の書いたコメントを検討する。また、教育実習も終えているので「教師としての立場」を自覚して基礎ゼミ生の書いたコメントを批評する。

そして専門ゼミ生は演習のまとめとして、基礎ゼミ生に「コメントの書き方」に関する提言を行い、基礎ゼミ生自身が書いたコメントの検討・修正を促す。また、基礎ゼミ生に向けた提案内容を受けて、専門ゼミ生自身が小学生の意見文の見本教材を執筆することで演習のまとめとする。

### 3. 実践の概要

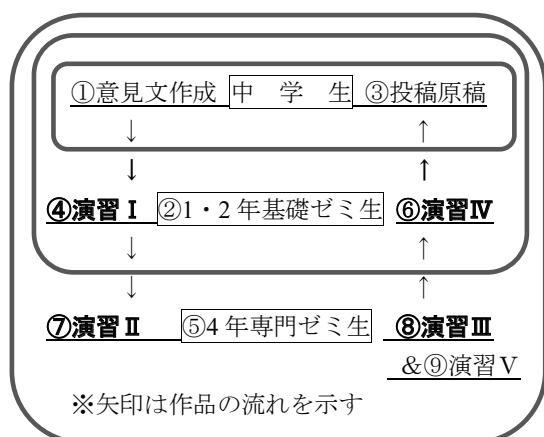
本実践で取り組んだ5つの演習（Ⅰ～Ⅴ）の関係を全体像として図示（図1）した。

内側の小さい枠は中学生の学習である。まず①中学生は意見文を執筆する。次に②意見文を学部生に読んでコメントをもらう。最後に③コメントを受けて自分の意見文を新聞用の投稿原稿として書き直す。（図1：①→②→③）

中の枠は基礎ゼミ生の異学年交流演習である。まず④演習Ⅰで基礎ゼミ生は中学生の意見文を読んで1次コメントを書く。次に⑤基礎ゼミ生の1次コメントを専門ゼミ生に批評してもらう。最後に⑥演習Ⅳで基礎ゼミ生は専門ゼミ生の批評を受けて中学生への最終コメントを仕上げる。（図1：④→⑤→⑥）

外の大きい枠は専門ゼミ生の演習である。まず⑦演習Ⅱで生徒の意見文を分析してからから基礎ゼミ生の1次コメントを批評する。次に⑧演習Ⅲで基礎ゼミ生にコメントの書き方に関する提言をまとめ、それを伝える。最後に⑨演習Ⅴで小学生向けに意見文の見本作品（小学5年生の教科書教材）を作成する。（図1：⑦→⑧→⑨）

図1 本実践の全体像



## 4. 各演習の実際

### (1) 演習Ⅰ：基礎ゼミ生が中学生の意見文を読んで1次コメントを書く

#### ①事前指導

中学生からコメントの依頼を受けるリモート会議の前に、基礎ゼミ生に対しては中学2年生の教科書教材「持続可能な未来を創るために」のコピーを配布し、大まかな学習内容と意見文の段落構成や意見の組み立て方、根拠の示し方などについて説明した。

また、論文作成に関するアカデミックスキルの資料<sup>6)</sup>を配布し、引用の仕方と出典の明記について確認した。

#### ②1次コメントを書く

教師によるコメントは大抵の場合、作品を読んで1つ1つに端的に書き込まれていくものである。一度書いたコメントを再度読み返して吟味することまではあまりしない。限られた勤務時間の中で行う評価活動であるし、いわゆる「赤ペン」とはそういう性格のものであろう。

令和4年4月28日、基礎ゼミ4回目の授業の始めに、千葉県内T中学校の3年生とリモート会議を開いた。代表の中学生より「2年生の時に書いた意見文にコメントを寄せてほしい」との要望を受け、クラスとして引き受けた。また、この会議には4年専門ゼミ生も参加し、中学生の要望を直接聞かせ、今後の演習（基礎ゼミ生のコメントを批評し、コメントの書き方を提言する）に対する心構えを持たせた。

この日はリモート会議を閉じてから、基礎ゼミ生の演習をはじめた。まず、作品分析である。1人当たり1,2本の意見文を読み、内容と構成を分析した。次に、中学生に見せない率直なコメントを赤の付箋に書いた。そして、率直なコメントをもとに総合的なコメントとして中学生に見せるつもりで1次コメントを大判の付箋紙に書いた。

#### ③1次コメントの相互批正をする

翌週の授業では半コマを使い、「協働的な学び」として相互批正に取り組んだ。基礎ゼミ生はペアになり、対象となる意見文を読みこんだ上で、

個々の基礎ゼミ生が書いた率直なコメントと1次コメントを読み比べ、内容と表現を吟味し必要であれば修正していった。

ここまでの演習について「中間振り返り」を書かせた。ほとんどの基礎ゼミ生が初めてのコメント執筆作業は「難しかった」と言う。例えば、1年生のAは次のように言う。

他人のしかも年下の文章を添削するのは初めてだったため、どこを直せばいいか、どんな言葉を使うかということにとっても気を遣い、終わった今でもこれで良かったのかと思うほどに難しい課題でした。

問題点の指摘が困難だという。学部生は実際に指導していないから、生徒への指導事項が分かっていない。アカデミックスキル以前の段落構成や理由付け、資料選びといった意見文作成の実際を大学生としても十分に経験していないので、問題点の指摘が困難なのである。

さらに1次コメントには問題点の指摘に留まらないで、改善のための助言までが求められる。会ったことのない中学生の心情を慮って言葉を選び、課題が終ってからも自分の表現が適切だったのか気にかかったようである。この学生は続けて次のように書いた。

ですがこの経験は教師になったときに一番役に立つと思いました。教師になればどのような課題でも添削する必要があるからです。教師となった時どうすればいいのかというのを考えさせられるいい課題でした。

学習支援とは離れた内容であるが、教職への意識を高めた演習になったようである。

最後に相互批評について2年生のBは次のように振り返った。

添削をして批評をすることが初めてだったのですが、簡単そうで難しかったです。他の人が批評したのを見ても私が感じたこととちがう批評

評をされていて新しく発見したこともありました。

自分の書いた1次コメントをペアワークにて相互批評を行った際、国語科の指導として自分1人では思いつかなかった問題点や、指摘する際の述べ方など、コメントに対する視野を広げることができたようである。

## (2) 演習Ⅱ：専門ゼミ生が基礎ゼミ生の1次コメントを批評する

まず、専門ゼミ生は本演習の事前学習として、意見文に関する中学2年生の学習内容を中心に小学校と中学校における意見文指導の系統について学んだ。

次に、専門ゼミ生は中学生の意見文を1人当たり3,4本読み、内容理解に努めながら段落構成の適否をはじめとした作品分析に取り組んだ。

中学校の国語教科書には見本作品に説明を加える形で次の7つを盛り込むようにしている。

- 1) 根拠の確認
- 2) 主張
- 3) 理由づけ1
- 4) 理由づけ2
- 5) 条件
- 6) 推論
- 7) 結論

専門ゼミ生はこういった内容が生徒の書いた意見文のどこに書かれているかを確認していった。

この節では具体例として中学2年生の鈴木の見文「飢餓を減らすために必要なこと」を取り上げる。この意見文の要旨は次の通りである。

SDGsの目標の1つである「飢餓をゼロ」を達成するために、「手前どり」と「計画的な購入・消費」を実践したい。これにより食品ロスを減らすことができる。また、食品を処理する際に発生する温室効果ガスを抑えることもできる。こうして飢餓を減らし環境を守ることができる。

この意見文に基礎ゼミ生Cが1次コメントを書き、専門ゼミ生DがCの1次コメントを批評した。なお意見文を分析するには付箋紙に記入するだけでなく、意見文の主張等に該当する記述部分は作品に直接傍線などを書き込んで指摘している。



①この意見文に対する専門ゼミ生Dの分析

- 1) 根拠の確認(飢餓人口の増加)
- 2) 主張(食品ロスを減らす)
- 3) 理由づけ1(温室効果ガス)
- 2)-a「手前どり」
- 3) 2)-aに対する理由づけ)
- 2)-b(理由づけも含む)「計画的に食べ物を購入し消費する」
- 4) 理由づけ2…記載なし
- 5) 条件…問題なし
- 6) 推論…問題なし
- 7) 結論…問題なし

・ 飢餓を減らすための主張として、2)「食品ロスを減らす」を挙げた。さらに、2)を実現する方法を2つ述べている。2)-aと2)-bである。  
※筆者注：2)-aと2)-bについては次項参照。

②基礎ゼミ生Cによる構成分析に対する専門ゼミ生Dの検討

専門ゼミ生Dは基礎ゼミ生Cの構成分析について次の2点を指摘した。

- ・ 4段落は、5) 条件ではないと考える。私は、2)「食品ロスを減らす」を実現する1つ目の方法であると考え、2)-aと捉えた。
- ・ 6段落は、6) 推論ではないと考える。私は、2)「食品ロスを減らす」を実現する2つ目の方法であると考え、2)-bと捉えた。

「食品ロスを減らす」という主張の理由づけが「温室効果ガス削減」であり、「食品ロスを減らす」ための方法が、4段落の「手前どり」と6段落の「計画的購入・消費」である。

この意見文では分かりやすく記述されているが、この意見文を担当した基礎ゼミ生Cは「食品ロスを減らす」ための方法を、条件や推論と捉えてしまったようである。この中学生の意見文を最後まで丁寧に読めば、7段落で「条件」が、8段落で「推論」が、見本作品に則って書いてあることがわかる。

③基礎ゼミ生Cが書いた「率直なコメント」に対する専門ゼミ生Dの検討

演習Iで基礎ゼミ生は中学生に見せないという前提で率直な意見を赤の付箋に書いた。この付箋に書かれた意見を読んで、専門ゼミ生Dがコメントを書きこんだ。

例えば、生徒の意見文には「食品ロス量」を示す円グラフの資料のコピーが貼ってある。その個所に基礎ゼミ生Cは、「事実を提示するのは良いと思う。」と書いた付箋を貼った。確かに生徒が引用したこの円グラフを読めば、日本国民が1人あたり年間約45kgも食品ロスをしていることが分かる。しかし、このデータの提示について専門ゼミ生は「このデータについて本文中で全くふれていないのはどうなのだろうか。」と指摘した。

確かに指摘の通り、意見文の本文中では取り上げられていないのである。論拠となるデータを引用したら、本文中で取り上げて論じなければならぬことまで気が回らなかったのだろう。また、これを読んだ基礎ゼミ生Cも気づかなかったのである。

14歳の中学生が書いた意見文を19歳の大学1年生が読む。非連続型テキストの読み取りだけでなく、記述面でも不慣れな実態があるのかもしれない。

④基礎ゼミ生Cが書いた1次コメントに対する専門ゼミ生Dの検討

基礎ゼミ生Cの1次コメントには、「理由→事実のつながりがとてもスムーズでわかりやすいです。筆者の意見がよく伝わってきました。」という記述があった。

この部分について専門ゼミ生Dは、「「理由→事実のつながり」の意味を理解しきれなかったが、褒める言葉選びや言葉遣いが良い。」と文章表現を評価し、次のような評価を伝えた。

「理由→事実のつながり」と抽象化した書き方では、相手に伝わりにくい。「理由」と「事実」の内容を要約したり、引用したりして指摘する必要があるだろう。あるいはコメントを書く側が作品に傍線を引いて書き込むなどの工夫も必要になるだろう。



こうした指摘を受けて基礎ゼミ生Cは演習Ⅳで最終コメントを書くことになった。

### (3) 演習Ⅲ：専門ゼミ生が基礎ゼミ生にコメントの書き方について提言を行う

基礎ゼミ生の1次コメントを批評した内容を踏まえて、基礎ゼミ生によりよいコメントを書くための提言を行うという活動の目的を説明した。

9名の専門ゼミ生は2グループ(4名と5名)に分かれて、それぞれで演習Ⅱでの気づきを持ち寄り、個人の気づきを集約してまとめていった。以下に集約の例を3つ取り上げる。それぞれ中黒(・)は個々の専門ゼミ生による気づきの引用であり、それらをグループで話し合っ集約した提言の文言が二重丸(◎)である。

#### 【集約の例1】

- ・意見文の構成が最後まで見きれておらず、本論の③から⑥の区別ができていなかった。
- ・推論には生徒の意見と根拠となる事実が必要だが根拠が書いていない生徒へ指摘がなかった。
- ・段落構成の指摘ができていなかった。など  
→◎学生が段落構成を理解してから、生徒の段落構成にコメントをしましょう。

#### 【集約の例2】

- ・出典を明らかにすることを示しましょう。
- ・参考文献と引用文献の違いを説明しよう。
- ・参考文献、引用文献が書かれているか。など  
→◎書式の統一「出典を明らかにする」「参考文献と引用文献の違いを示してあげよう」

#### 【集約の例3】

- ・中学生が何を書きたいのかを汲み取ってあげる。
- ・書き手の意図を理解する。
- ・生徒がどこまで推論する際に内容(構成)を理解しているかを見抜く必要がある。
- ・新しい情報を書いていたが、生徒が書いている内容と合っているかの精査ができていなかった。  
→◎書き手の意図を理解してコメントをしよう。

以上のような集約をもとに提言内容の表現を検討した結果、専門ゼミとして次の7つを提言としてまとめ、基礎ゼミ生に伝えることにした。

- ①誤字脱字の指摘は必ずしよう(主語述語の対応、文末表現の統一も)。
- ②大学生も中学生も文章を書く際には「～だと思ふ」ではなく、「～だ」と言い切ろう。
- ③作品の段落構成を理解してから、段落構成に関するコメントをしよう。
- ④書き手の意図を理解してコメントしよう。
- ⑤具体例を出したり、指摘部分に線を引いたりして、わかりやすく伝えよう。
- ⑥指摘を入れた後はフォローを入れよう。例「文字がきれいですね。」など
- ⑦出典を確認しよう(参考文献と引用文献の違いを示してあげよう)。

### (4) 演習Ⅳ：基礎ゼミ生は提言を受けて1次コメントを最終コメントとして書き直す

専門ゼミ生が基礎ゼミ生に対面で提言を行った後、基礎ゼミ生は自分の1次コメントに添えられた専門ゼミ生からの批評を読んで、中学生に向けた最終コメントの執筆に取り組んだ。本節では3人の基礎ゼミ生が専門ゼミ生の指摘をどのように受け止めたのか具体的に見ていく。

#### ①基礎ゼミ生Eのコメント

##### 1) 基礎ゼミ生Eの1次コメント

意見文の中で繰り返し「極度の貧困状態」という言葉が使われている。しかし、説明が不十分であることを、次のように指摘した。

貧困のところをもっと明確にするとさらに良い内容になると感じました。

##### 2) 専門ゼミ生Fのコメント

基礎ゼミ生Eの「もっと明確に」という指摘に対して、専門ゼミ生Fは「何をどの程度明確にするのか」を次のように具体的に指摘した。

「貧困のところをもっと明確に」の部分はピンクの付箋に「貧困の層」について触れているため、「貧困の中でも生活状態がどのような人のことを取り上げるか」や、「極度の貧困状態とはどういう状況なのか」、と書いた方が、「明確に」の部分がクリアになってくると思う。

### 3) 基礎ゼミEの最終コメント

専門ゼミ生によるこの指摘を受けて、最終コメントでEは次のように書き直した。

…… (前略) ……「貧困の層」について、貧困の中でも生活状態がどのような人のことを取り上げるか、極度の貧困状態とはどういう状況なのかを明確にするとさらに良い。

専門ゼミ生Fによる指摘を自分でも納得して受け止め、このように書き直したものと思われる。

### ②基礎ゼミ生Gのコメント

#### 1) 基礎ゼミ生Gの1次コメント

演習Iで、1年生Aは意見文に引用されている「食品ロス量」の円グラフについて、①(3)「事実を提示するのは良いと思う。」と評価し、これを踏まえて次のように書いた。

事実を提示しているのはとても分かりやすく、良いことだと思います。ぜひ続けていきましょう。

#### 2) 専門ゼミ生Hのコメント

しかし、専門ゼミ生Hは①(3)に対して「このデータについて本文中では全くふれていないのはどうなのだろう」と批評した。

#### 3) 基礎ゼミ生Gの最終コメント

専門ゼミ生の指摘を受けてGは、次のように書き直した。

提示しているデータについて、少しでも触れていくとよいと思います。事実を提示することで説得力が増すため良いと思います。

引用したデータについて本文で触れられていないのは明らかに推敲不足であり、注意を促したい箇所である。

また、最終コメントの4つ目には、「著作権の可能性があるので、最初の写真の出典を書いた方が良いと思います。」と書いた。これは専門ゼミ生が指摘していないことである。提示資料を見た

ら出典を確認するという意識が根付いたものと考えられる。

### ③基礎ゼミ生Jの振り返りから

最終コメントを書き終えた基礎ゼミ生Jは、ここまでの演習を次のように振り返った。

(前略) ……自分では気付けないような生徒へのアドバイスや文章の見方をされていて、とても勉強になったし、参考にしようと思った。特に私が今回勉強になったのは接続詞の使い方と、例えば(ex.)付きのアドバイスをすることの大切さ。今回先輩から教わったことは添削する時以外でも必ず活かせるので、活かしていこうと思える機会だった。

専門ゼミ生が基礎ゼミ生を唸らせる批評ができたのは彼らが初等国語科指導法を履修していたことだけでなく、教育実習を経験して教職に対する向き合い方、演習に取り組む際の本気度に大きく影響したものと思われる。

### (5) 演習V：専門ゼミ生は基礎ゼミ生に提言した内容に沿って意見文(小5)の見本作品を書く

紙幅の関係で演習の概略のみ記しておく。意見文に関する専門知識を活用して学習支援に取り組んだ専門ゼミ生は、演習のまとめとして小学生の意見文学習の資料となる見本作品の作成に取り組むことにした。

取り上げた教材は「世界遺産 白神山地からの提言 一意見文を書こう」(『ひろがる言葉 小学国語五下』教育出版)。教科書会社の指導書によれば、この单元では単元の指導時数10時間のうち5時間をかけて「自分の立場を明確にして意見文を書く」学習をするとの案が示されている。教科書には見本作品が示されているが、実際に指導者となる学生が見本作品を書き上げることで、指導事項を確認するだけでなく指導上の留意点などの気づきを促すことを狙った。

## 5. 学習者と指導者に対する思い

基礎ゼミ生には演習Ⅰと演習Ⅳのそれぞれの活動の終わりに自分自身の学びを振り返らせた。前者を中間振り返り、後者を最終振り返りと呼ぶ。これらを資料として学びの過程を確認する。

### (1) 学習者の気持ちを慮る

基礎ゼミ生Kは当初コメントの書き方について悩んでいた。担当した意見文の主張がはっきりしていなかったためである。

#### ①基礎ゼミ生Kの1次コメント

今回届いた意見文はどれも段落意識が明確であり、トピックを意識して段落を構成していこうとしていた。この点は誉めやすかったのだろう。Kは次のように書いた。

段落分けをしていて読みやすく分かりやすい文構成になっていて良いと思います。しかし、意見文なので、調べたことをまとめるだけでなく自分自身の考えを書けるとなお良くなるでしょう。また、主張（仮説）や、それに対しての理由づけが弱いと感じます。文章の終わり方として結論が最後にあるとよいです。……（後略）……

調べたところまでを認めた上で、自分の意見を作りなさいというコメントである。これだけ書ければ十分とも思える。これを書いたKの思いはどうだったのか。

#### ②基礎ゼミ生Kの中間振り返り

1次コメントを書いた後に中間振り返りを書かせた。コメントの書きにくさから子供の頃の思い出が想起されたようである。

意見文の添削をしてみて、どのようにアドバイスやコメントを書くかすごく悩みました。直した方が良いところだけを書いてしまうと、受け取った子はもうやる気が出なくなってしまうかもしれないし、だからといってむやみにほめて書くのも、その子のためにはなりません。私自身も小学生の時の図工で担任の先生がくれた

感想文で少し嫌な思いをしたので、すごく慎重になりました。

また、添削することは難しいと感じました。時間も多にかかったので、1人1人にコメントを書いたり、テストの採点をする先生達はすごかったんだと改めて思いました。

コメントを書く際に「慎重にな」ることは大切なことである。これは自分で指導すれば、何を指導したのかが明確になり、ある程度は自信をもってコメントが書けるようになるだろう。しかし、改善に向けた指示を書くことへの戸惑いがあった。この点について専門ゼミ生は端的に指摘した。

#### ③専門ゼミ生Lによる分析

演習ⅡにおいてLはこの意見文を次のように分析した。

私はこの意見文はコピーペーストなのではないかと思います。

- ・自分の思いや考えが1つも書いてない。
- ・抽象的な表現しかない。
- ・難しい言葉がある。
- ・とつぜん箇条書き

◎主張と結論という大切な部分が抜けていると思う。

専門ゼミ生Lの分析は適切である。意見文の書きぶりが未熟なためコメントがしづらいのなら、その点を指摘すべきである。

#### ④基礎ゼミ生Kの最終コメント

専門ゼミ生Lによる剽窃の可能性の指摘を受けて「駄目なものは駄目だと指摘すべき」だと確信を得たのか、一次コメントで指摘した内容を改めて次のように書いた。段落分けについて誉めた後に、次のように指摘・助言した。

……（前略）……主張（仮説）がなく、調べたことを述べているだけになっているので、自分自身の考えを書けると良くなると思います。……（後略）……



自分自身の考えを書くように求めることは変わらなかった。しかし、1次コメントにおける「主張（仮説）や、それに対しての理由づけが弱いと感じます」という表現は、最終コメントで「主張（仮説）がなく、調べたことを述べているだけになっている」と端的に指摘できた。専門ゼミ生の批評に自信が持てたと思われる。

## （2）指導者になろうとする思い

演習Ⅳにおける最終振り返りでは、基礎ゼミ生の思いは意見文に対するコメントに留まらず、教師の仕事について思いを巡らせていた。

### ①基礎ゼミ生Mの最終振り返り

班員の添削を読んで自分とは違った考えや、意見文をしっかり読んだという思いが伝わってきた。この学習では、中学生にどのように伝えたら向上心が削れないかということを考えながらアドバイスを書くのが難しかった。また、おかしいと思ったことを言葉に表すのが非常に難しかった。今回の授業を終えて、下の子に優しく教える難しさとともに勉強なども教えてみたいという気持ちがさらに強まった。

同じ課題に取り組んだ他者の書いたコメントを読むことで、課題と向き合う姿勢を確認している。また、指導言を書くことの難しさを自覚したものの、「勉強なども教えてみたい」という意欲を示している。

### ②基礎ゼミ生Nの最終振り返り

今回、中学生の作文を読んで、それに対して意見を考えてみて、1人分でも多くの時間を費やすのに、世の中の教員はそれを30人前後の人数をやっていると思うとすごいと思った。意見とは言いつつも、子どものやる気が失せるようなことは言ってはいけないし、どうしたら次につながるのかという所が一番大変で難しかった。また、語彙力の無さを痛感した。そのため、今後は語彙力の向上を目指したい。

今回の演習経験から実際の教師の仕事に思いを馳せている。さらに自分の語彙力について課題を見出した点は評価できる。

### ③専門ゼミ生Pが示した意識

教育実習が済んだ専門ゼミ生の目には基礎ゼミ生のコメントのおおらかさ、教育に対する姿勢の甘さが気になったようだ。専門ゼミ生Pは振り返りで次のように書いた。

熟読していないのかなと思う人はちょっとした漢字ミスにも気づいていなかったため直すこともなかった。……（中略）……疑問を投げるだけでその人の文章を理解しようと試みる様子がありあまり伺えなかったところがある。何を言いたいのかよくわからないことはわかる。ただそれを私はこう解釈したけどあってる？ そのように伝えたかったのならこう書けばもっとわかりやすくなると思うなどと伝えてあげると丁寧かつ中学生もやりやすいのではないかなと思う。何を書きたいのか汲み取り、ブラッシュアップさせるのが我々の仕事だろう。そして、どういう表現をすれば中学生に伝わるか、わかってもらえるかを考えてアドバイスすることが大切なのではないだろうか。

学習者の本意を知る必要性を説き、向上を支援することが「我々の仕事だろう」と言い切る。演習に対して真剣に取り組む態度は立派なものである。このような専門ゼミ生の演習に対する熱量は、基礎ゼミ生にも伝わっている。最終コメントを書き終えた基礎ゼミ生Cは、演習の振り返りで次のように書いた。

4年生のコメントはとても的確なコメントでとても分かりやすく、自分が気づかない所まで気づいており、すごかった。自分もあんな先輩のようにになりたいです。その為にまずはこのゼミの発表をより良いものにしていきたいです。

専門ゼミ生のコメントの的確さ・深さに「すごかった」と素直に感動している。

## 6. 授業改善に向けて

今回の実践から得た知見を筆者が担当する科目の授業改善をすることで学生に還元したい。

### (1) 初等国語科指導法

「情報の整理」や「考えの形成」に関する系統を説明する講義ではなく、演習を通して学生に能動的に理解させていきたい。そのために児童の意見文に授業者としてコメントを書くような演習は実施したい。学部生としてコメントを書くのではなく、授業者と想定することで指導事項や評価規準などについても理解を深めさせたい。

### (2) 専門ゼミ

小学生の意見文にコメントを書く演習を取り入れてみたい。実際に小中学校と連携を行うには、学生の批評の質にばらつきが出る可能性があり慎重に行うべきである。そこで筆者が自作した意見文を教材として、学部生がコメントを書き、それらをグループ内で相互批評していく演習が考えられる。

### (3) 基礎ゼミ

1, 2 年合同で行う基礎ゼミは15回の授業内容が隙間なく計画されているため、シラバスに記載のない内容や、適時性のある課題に取り組むことが難しい。数時間でも担当者による演習が組み込まれるようにシラバスを検討していきたい。

#### 注

- 1) 生活綴り方運動の流れをくむ日本作文の会の実践家として知られた亀山五郎には「赤ペン」をテーマとした著作、亀村(1979)『子どもをはげます 赤ペン《評語》の書き方』があり、「赤ペン十一か条」を提案している。しかし、亀山(1979)が赤ペンを入れる対象は生活作文が中心であり、意見文は取り上げていない。
- 2) 戸田(1973)は昭和中期の作文評価の実情を次のように指摘している。「作文の処理といえば(いや、作文の指導といえば)、子どもに書かせ、それを読み、それに赤ペンを入れ、そして子どもに返さなければならない——という公式みたいなものが頭にこびりついている人がいるでしょう。」
- 3) 小学校における組織的な実践研究の成果として和歌山市城北小学校(1983)が著した『国語科作文指導の科学化』

がある。この中に第5学年の実践事例として「初歩的な意見文の書き方に慣れる」がある。授業記録の中には、模範作文をスクリーンに投影して、内容を検討している場面が記述されている。

- 4) 児童生徒が書いた作品に対して指導者である教師が指導言を書き込む作業は、「赤ペンを入れる」、「一言添える」、「コメントを書く」等と呼ばれることが多く、端的に「赤」「朱書き」「コメント」等と呼ばれることもある。これらを本稿では「コメント」と呼ぶことにする。コメントを書く作業を最終原稿に対して行うのであれば評価が目的になり、途中原稿であれば改善点の指摘が目的となる。
- 5) 筆者が副代表を務める研究会でこの話があり、後日手紙で正式に依頼があった。学校の管理職を通した正式な依頼ではなく、研究同人として実践に協力してほしいというレベルでの依頼である。手紙には「大学生にとっては中学生の作品を批評するという実際の作文指導の授業ができるのではないかと思います、大きな負担にならないようにお願いいたします」とあった。
- 6) 井下千以子(2017b)「ステップ4 執筆する」(pp.62-63)をコピーし、直接引用と間接引用について重点的に説明した。

#### 引用・参考文献

- 愛知県西加茂郡三好町立天王小学校(1986).『段階をふめば作文力はここまで伸びる』明治図書
- 市毛勝雄(1988).「『評語』で変わる子どもの作文」.市毛勝雄・須田実編著『『評語』で変わる子どもの作文』, pp.7-20. 明治図書
- 井下千以子(2017a).『大学の学び入門』慶應義塾大学出版会
- 井下千以子(2017b).『思考を鍛える大学の学び入門』慶應義塾大学出版会
- 亀村五郎(1979).『子どもをはげます 赤ペン《評語》の書き方』百合出版
- 田近洵一ら(2019).平成31年検定版『ひろがる言葉 小学国語五下』教育出版
- 田近洵一ら(2020).令和2年検定版『伝え合う言葉 中学国語2』教育出版
- 戸田唯巳(1973).『作文=どのように書かせるか』明治図書
- 牧戸章(2003).「『書くこと』と〈対話〉」『〈対話〉をキーワードにした国語科授業の改革』実践国語研究別冊 No.249, pp.97-102. 明治図書
- 文部科学省(2017).『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省(2017).『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省(2018).『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編』東洋館出版社
- 矢部玲子(2022).「多面的な見方・考え方を育てるための文章指導に向けて」『月刊国語教育研究』No.603. 2022年7月号, pp.4-9. 日本国語教育学会
- 和歌山市立城北小学校(1983).『国語科作文指導の科学化』明治図書